別科日本語研修課程　この一年を振り返って

－２００５年度活動報告及び今後に向けて－

大河原　尚

Ⅰ．はじめに

別科日本語研修課程（以下、別科）では、２００５年度１３名の学生を受け入れ、一年間の活動を行ってきた。本報告では、別科でのこの一年間を振り返るとともに、今後に向けての課題についても考える。そうすることで、一年間の活動報告を単なる毎年のくり返しで終わらせるのではなく、少しでも将来の改善につながるようなものとする必要があると考えるからである。

特に今年度（２００５年度）は、別科の中心的機能である「日本語教育」の面において、その方向性やその内容が問われるような問題にも直面し、あらためてそれらの課題の重要性を認識せざるを得ない１年となった。また、別科に嘱託講師の制度が導入されて９年が経過したが、別科を取り囲む学内外の環境や状況は大きく変わりつつある。今年実際に直面した根本的な問題がそれを顕著に物語っている。この９年間の別科の取り組みを踏まえつつも、新しい環境に大きく踏み出す時期に来ているのではないだろうか。

Ⅱ．２００５年度活動報告

２００５年４月から２００６年３月までの間、４０週にわたり、日本語は毎週月曜日から土曜日まで三つのクラスに分かれて、英語は毎週２コマ（１コマ90分）を二つのクラスに分かれて授業が行われた。以下日本語科目について、その詳細を報告する。

１．学生とクラス編成

学生は１３名が一年間在籍し（定員３０名）、その出身国の内訳は、

中国：　　１１名（男５名、女６名）、
スリランカ：１名（男１名）、
トンガ：　　１名（男１名）。

クラス編成は、４月の授業開始前に行ったクラス分けの試験（文法、読解）及び日

本語による面接の結果を基に、日本語のレベルによって３クラスに分けた。各クラスは、レベルの低いほうから、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとした。例年、学生の学習状況によっては授業期間中、数名の学生に対しクラス移動を行うこともあるが、今年度（２００５年度）は、その後のクラス移動は行わなかった。

授業終了時の各クラスの人員は、

Ⅰクラス：４名（中国：３名、トンガ：１名）
Ⅱクラス：６名（中国：５名、スリランカ：１名）
Ⅲクラス：３名（中国：３名）

今年度のクラス編成においては、各学生間の日本語能力差が顕著であり、特にⅡクラスとⅢクラスは、例年の各クラスのレベルから見るとかなり能力的にも上回っていた。Ⅱクラスの学生は、例年ならⅢクラスに入るレベルのものが多く、授業開始時点において、これまで別科で想定してきたⅡクラスのレベルとは異なっていた。さらにⅢクラスの学生も、これまでの学生の授業開始時における日本語レベルを大きく越え、クラス分け試験の結果から見ると、例年のⅢクラスの別科修了時レベルに近いと判断できた。

２．年間活動（学年歴）

４月	入学式、ガイダンス
	授業開始
５月	親睦会
６月	
７月	前期集中授業
	前期末試験
	前期授業終了
８月	（夏季休暇）
９月	後期授業開始
１０月	学部推薦入学の推薦者決定
	留学生研修旅行参加（京都・奈良）
１１月	（大学祭による休講）
１２月	交流会
	（冬季休暇）
１月	後期末試験
	後期授業終了
	補講
２月	
３月	別科修了者発表
	（春季休暇）
別科修了式	

３．一年間の授業

〈別科全体を通しての教育方針として〉

本学別科は３つのクラスに分かれてそれぞれ授業を進めていくが、各クラス共通の授業における基本的な教育方針として、次の３点を各教員の間で確認して、各クラスの授業運営に当たった。

１．学習初期にある学生に対しては文法や文型を中心とした授業を行い、授業が進むにつれて、徐々に文法や文型から、内容を重視し、トピックを中心とした授業に移行していく。
２．別科の日本語教育の基調として、いかに表現するかということよりも、「理解」することに重点を置く。
３．学習の焦点が、細部から全体へと広がるように授業を進める。

以上の点は、一年間の別科の日本語教育での基本的な考え方として、各クラス担任(嘱託講師３名)は、これらの点を考慮し、それに沿った形で、具体的計画(教材や授業方法など)を決めていくこととした。

〈時間割〉

毎日の授業は、全て必修の科目で、１時限目（午前９：２０開始）から３時限目（午後３：００終了）あるいは４時限目（午後４：５０終了）まで行われた。但し、土曜日は２時限目（午前１２：４０）まで。

２００５年度　別科時間割

	I 9:20 ～ 10:50	II 11:10 ～ 12:40	III 13:30 ～ 15:00	IV 15:20 ～ 16:50
日	日本語演習 1	日本語演習 2	日本語演習13	
火	日本語演習 3	日本語演習 4	日本語演習14	日本語演習15
水	日本語演習 5	英　語	日本語演習 6	
木	日本語演習 7	日本語演習 8	英　語	日本事情
金	日本語演習 9	日本語演習10	日本語演習16	
土	日本語演習11	日本語演習12		

４．各クラスの授業内容の概要

各クラスの授業は、上の基本方針に沿って行われるが、具体的には３名の嘱託講師がそれぞれの担当したクラスの一年間の目標、進度、教材、授業内容など授業全般に関する事項を最終的に決定し、各クラスの一年間の授業の運営に当たっている。以下、各

クラス担任の嘱託講師から、今年度一年間の授業運営について報告を行う。

〈Ｉクラス〉担当：清水（担任）、石井、福嶋、大河原、松嶋（報告：清水）

①目標：

一年間を通しての目標として、

（１）いわゆる「初級」で取り上げられている文型（文法事項）と基本的な語彙を一通り習得する。

（２）その上で初歩的な読解用教材を読み、必要な能力（語彙・漢字・文脈を読み取る力など）を身につける

ということを考えた。

日本語学習経験の殆どない学生であったため授業開始時は、日本語の音声を聞いて判別できること。文字の識別ができることを目標とし、前期終了までに初級前半の文法事項の学習を終えることとした。また、日常的な日本語でのやり取りができる程度のコミュニケーション力を養うことに主眼を置いた。

後期からは前期に学習した文型表現を復習しながら初級後半及び語彙の習得を目指した。それと同時に初歩的な読解用の教材を読み、それ迄の文単位の学習から文脈をとらえて理解していくための学習にも力を入れた。

②教材：

「みんなの日本語初級Ｉ、Ⅱ」

「みんなの日本語初級Ｉ、Ⅱ　初級で読めるトピック２５」

「みんなの日本語初級Ｉ、Ⅱ　聴解タスク２５」

③授業内容：

授業は、嘱託講師３名のほかに非常勤講師２名の計５名で、リレー形式で行った。

原則として、１時限目を前日までに導入を済ませた課の練習の時間とし、２時限目を新しい学習項目の導入の時間とした。

また、午後の３、４時限目の時間を使って、それまで学習してきた文型及び文法事項の復習、週間試験とそのフィードバックを行い、文法、文型表現、語彙の定着を図った。特に、前期から毎日１０題ずつの書取り（聞いて書く）の小テストを行った。（後期は週一回の週間試験に含めて行った。）

④一年を振り返って：

授業開始時の学生は３名（中国２、トンガ２）だった。日本語学習暦も殆どなく、ゼロスタートに近かったので、音の判別、文字の識別から始め、発音の明確さを心掛けた。毎日１０題の書き取りをして、日本語を聞いて書く姿勢を身につけるようにした。６月に１名（中国）が加わり、４名になってクラス授業をしていく上で活気が出てきた。遅れてきた学生もよく努力したので、前期終了時にはクラスとして初級前半まで順調に進んでいった。

後期が始まったとき、学生の一人が夏休み中に初級の教科書を全て勉強してしまったということで他の３人との学力の差がはっきり現れたので、ある時間だけⅡクラスの授業に出席させ様子をみた。１２月になり、クラスの中で２名とはっきりと学力の差が出たので力のある２名には練習問題を多く与えたり、レベルの高いことに挑戦させたりして、他の２名にはわからないところのケアをするという一部複式授業のような形をとり授業を進めたりした。クラス授業において、学力のある２名が他の２名を引っ張っていく役割もしていたのでＩクラスとしての当初の目標は何とか達成できたという思いを強くしている。

〈Ⅱクラス〉担当：松嶋（担任）、井上、塩田、増山、清水、大河原（報告：松嶋）

①目標：

「年間目標」として、初級期には、まず、いわゆる「初級」で取り上げられている「文型（文法事項）」と基本的な「理解／表現語彙」を学習する。その上で、それらを運用しながら、会話文や文章全体（文脈）の中で理解及び表現する能力が身につくようにする。初級終了後から中級までの目標は、「初級」で取り上げられた「文型（文法事項）」と基本的な「理解／表現語彙」を運用しながら、会話文や文章全体（文脈）の中で理解及び表現する能力が身につくようにする。これらを踏まえて、中級前半から中期レベルの力を養成する。具体的には、学部に行ってから、講義を聴くのに少しでも役に立てるように、読む・聴く力を引き続き伸ばし、その上で、日本語で考え、表現できるように、話す・書く力もつくように考えた指導をする、とした。初級期はもとより、初中級～中級期でも、基本的には、文を全体からとらえる、細かいことではなく構造全体からとらえられるよう、指導を心がけたつもりである。

②使用教材：

《リレー用教材》

初級：

「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」

初中級～中級：

復習兼速読教材：「みんなの日本語　初級で読めるトピック２５　Ⅰ、Ⅱ」（Ⅰは第２課以後）

精読教材　：「留学生の日本語Ⅰ」、
生教材を使った作品の読解・鑑賞

聴解教材　：「聴解タスクⅡ」（第４０課以後）、
「毎日の聞き取り plus ４０　上、下」（上巻は抜粋）、
「毎日の聞き取り中級　下」（２８課以後抜粋）、
「なめらか日本語会話」、及び「上級の力をつける聴解ストラテジー」（抜粋）を、担当日を分けて使用。

《リレー以外の教材》

初級（前期）：

会話教材：「みんなの日本語　初級で読めるトピック２５　Ⅰ」（２０課まで）
聴解教材：「聴解タスクⅠ、Ⅱ」（Ⅱ第４０課まで）、
「楽しく聞こうⅠ、Ⅱ」（抜粋）

初級終了後（後期）：
速読教材：「速読の日本語」、
「読みへの挑戦Ⅰ」
文法（復習）：「わかって使える日本語」（抜粋）

通　年：
作文教材：「みんなの日本語作文」（抜粋）
日本事情教材：「話そう考えよう初級日本事情」（抜粋）

③授業内容

午前（水曜日は1、3時限）に主教材を用いるリレーの授業と、午後に、それ以外の個別に指導する授業とに分けて行った。リレー以外の時間では、リレー授業の補い及び復習、定期的な「週間試験」を行い、学生の学習到達度を見ながらフィードバックしていくという指導を行った。また、午後の担任の時間は作文及び日本事情の他に、前期は聴解や会話、後期は文法や速読といった個別の力を養成する授業をあてた。

初級：

今期は従来の別科のリレーによる授業カリキュラムに加え、金曜日を除く導入の時間の主教材を使用する授業に、聴解優先教授法の一つであるTPR（Total physical response）を改良した方法を、教科書と併用して指導（以下、「改良TPR」）を行なった。その理由は、昨年度本学Ⅰクラスで同教授法による指導を行なった結果、クラス全員ではなかったが、学生に、文法の理解力・聴解力の向上、類推して理解する力の顕著な向上が見られたことと、今期のクラス構成が中国人学生の中に非漢字圏のスリランカ人が入ったクラスであり、また、学生間のレベル差もかなりあったので、総合的な日本語力の向上、より良好な学習効果が得られることを狙いかつ期待して、今期も取り入れることにした。実施期間は4～7月上旬まで行い、後期開始日に1日だけ行った。指導方法は、毎時間の冒頭に平均10分を用いて「改良TPR」による指導を行った。

初中級～中級：

「改良TPR」による指導で、構造全体から物事に取り組む基本的な姿勢ができたという設定の下で、初級終了後は、いろいろな教材にチャレンジする形をとった。中には多少難度が高いものもあったが、いろいろ体験させることを狙いとした。リレーの授業に「精読」と「聴解」を組み込み、終了後は、生教材や話し言葉の会話力を補った。

その他、通年で「作文」と「日本事情」を行った。「作文」では、作文の書き方の基本、自己紹介、志望理由、・研修旅行など、最低必要な作文力の養成を行った。「日本事情」

では、生活していく上での基本について・日本の生活習慣/文化比較他を授業内容とした。その他、学部進学後の「履修登録」についてなども加えた。原則として、一週間に「作文」を2回、「日本事情」を1回の組み合わせで行った。

④一年を振り返って

今期は、クラス構成が中国人とスリランカ1名計6名のクラス構成で運営していくこととなった。さらに特筆すべきことは、今期の場合、例年と異なり、4月のクラス分けの段階で、全くの初級レベルと、それ以上のレベル、通常別科で想定しているⅢクラスレベルをはるかに超えていると思われた学生との差が顕著で、Ⅰ・Ⅲクラスに該当しない者がすべてⅡクラスに入らねばならなかったことだ。従って、開始時に、Ⅱクラス内での学生間に、ここ数年来なかったレベル差が見られた。

結果としては、上述したようなクラスに、しかも限られた時間内でいろいろ挑戦させた感があったが、学生の資質が、例年に較べてよかったこともあり、全授業終了時には、当初の目標であった、文法を文脈から理解すること、聴解力の向上、一定の長さの文章への理解・読解力は、ある程度はついたと考えられる。また、作文力についても、ごく限られた時間内での指導で、表現力はまだまだの段階だが、自身で述べたいことを、表現する最低の力はついたのではないだろうか。主教材（初級教材）の進度も、基本的には積み残しの形ではなく、学生がほぼ理解・定着した形で、従来よりも、早く終了することができた（後期開始後第2週目の9月末に終了）。

しかしながら、問題点も残った。まず、学生の全授業終了時の到達レベルについてだが、上述のように、「ある程度の力」はついたが、それは担当者が当初予想した到達度よりかは予想外に低かった。特に、今期は「改良TPR」による指導を行なったのにもかかわらず、学生の会話・発音能力に著しい向上が見られなかったことだ。中級期になっても、一部の学生は日本語らしいイントネーションがなお不十分であり、文法や読解作業における自ら類推し理解していく自己産出能力も、これまで筆者が他機関で指導した場合に見られた仕上がり状況からは程遠かった。もちろん、それが「改良TPR」による指導に原因を求めるだけではなく、学生の資質その他の条件に起因した可能性も否定できないが、従来の指導を行った場合と大差ない仕上がりになってしまったのである。

そこで、全授業が終了した段階で、今期「改良TPR」による指導が上手く作用しなかった原因について、授業記録、一緒に指導を行なった講師2名及び学生からの感想・評価を材料にして、今期の指導全体を振り返り、原因分析を行なった。その結果、大きく以下の2点に起因することが判明した。まず、第1点は、コーディネーターの力量不足によるものである。今期、指導開始時に一緒に指導を担当した非常勤講師2名に十分に説明し、理解していただいたつもりであった「改良TPR」への教育理念や主教材とのトータルな折衷指導についての考え方が、実際は、上手く共有化されていなかった。それは、結果的には、コーディネーターである筆者の説明不足によるものであった。また、今期のようなレベル差がある学習者のレベルに合わせた、臨機応変な「改良TPR」用の指導プログラムを作成することができず、前半は、昨年度Ⅰクラスに指導したものとあまり変わらないプログラムになっており、後半も、レベルに合わせた応用プログラムを一部取り入れはしたが、中途半端な状態の指導で終わっ

てしまった。その結果、文型導入時に、学生にあいまいさを残してしまった。

第2点は、前述した担当講師間での指導に対する共有化ができないまま指導を進行させてしまったことで、実際の実施方法にも、実施内容にも、問題があったことだ。特に実施方法であるが、「改良TPR」にあてる時間は、平均約10分としたのだが、これが、TPR（Total physical response）による効果を生み出すためには、短すぎたということだ。約10分という短い時間では「改良TPR」本来の、学生に新しい文型をたくさん聞かせる、さらに学生の反応に応じてさまざまな応用を行なうことは難しかった。また、学生に知的レベルの高い応用活動をさせる時間が不十分だったために、活動自体が単調になってしまった。実施内容においても、平均10分という時間では、学生の反応に即した応用まで工夫することは難しかったと考えられる。さらに、「改良TPR」と主教材の指導とを有機的に結合させずに文法指導を行なってしまった。上述したような問題のある指導を行ったため、学生たちには十分な効果が出なかった。それどころか、効果を論ずる以前の仕上がりになってしまった。担当講師たちは、「改良TPR」による指導を行ったつもりであったが、結果的に、今期行なった「改良TPR」による指導は、本来のそれではなかったと結論づけられる。コーディネーターとして、担任である筆者の責任は大きい。今期出た結果を十分に反省し、今後は、慎重に対応していかねばならない。

その他の問題点として、学部入学が決まってから、特に第1時限目の学生の出席率が、例年にもれず、低くなってしまった。後期に、学部に行っても困らないような、実践的な要素を取り入れた内容の授業をせっかく組んでも、そういう学生には、中途半端に終わってしまった感が否めない。遅刻・欠席する学生はだいたい決まっており、折に触れて個別に、また全員に出席するよう指導はしたが、なかなか効果があらわれなかった。これは学生個人の事情による要素もあるが、カリキュラム等を含めて、今後は、別科だけでなく学部とも連携させて考えるべき問題ではないだろうか。

〈Ⅲクラス〉担当：大河原（担任）、前田、小林、小田、清水、松嶋（報告：大河原）

①目標：

今年度のⅢクラスの学生は、例年の学生と比べ別科入学前の日本語学習経験が相当程度あり、学生間のばらつきはあったものの、授業開始時に既に日本語に関する知識・能力もある一定のレベルに達していた。そこで、例年の「理解」中心の授業計画を急遽変更し、「理解」からさらに踏み込んで「いかに表現するか」という点も授業全体の目標として組み込んだコースとすることとした。

《目標となる「日本語能力」に対する基本的な考え方》

そこで、Ⅲクラスの授業の計画を立てる上で、目標とする「日本語能力」に対する基本的な考え方として、従来の四技能（聞く、読む、書く、話す）ではなく、次のような「理解」「表現」「資源」の３つの要素を考えた。

「理　解」：

理解するという行為を書かれた文章や音声といった媒体によって区別するという

よりも、その時にその学生が使うことができるあらゆる手がかりや情報（言語情報であれば、それらが音声によるのか文字によるのかに関わりなく）さらには学生自身が持っている知識や経験の記憶を総動員して、眼前で展開されている内容の理解を行なう。もちろん、状況によっては音声による言語情報が圧倒的に多くて文字によるものが極端に少ない場合もあるだろうが、行為としては総合的なものであるはずである。よって、例えば、音声だけを聞いてわかるというよりも、音声による情報が極端に多い場合に、それ以外の利用可能な情報や知識を総動員して、その理解のためにいかに対応したらいいかを練習する必要があるだろう。

したがって、ある練習の状況では、音声による理解がどのくらいできたかということよりも、対象となる事柄の内容の理解がどのくらい達成できたかを問題となる。

「表　現」：

まず、理解すること表現することは別の作業。従って、聞いたり読んだりしてよく理解している意味やイメージ、事柄の流れの内容でも、その同じ内容をいざ表現するとなると、理解していることがそのまま表現できるのではなく、理解してわかっている内容そのものとは別の、その学生によって再度焼き直された新たな構成物として「表現」がある。

そして、その表現の際にも、理解のときと同じようにあらゆる知識などが学生の中で総動員されて「表現」となって現れる。だから、その表現のチャネルが音声か文字のどちらかということではなく、また他の要素があるかもしれないが、その表現の場で利用可能な全ての媒体を利用して、総合的な課程の結果として「表現」が達成される。

「資　源」：

上の一つ一つの、「理解」及び「表現」活動の際に総動員される学生の持っている知識や、そのとき利用可能なあらゆる情報が、その際に必要な「資源」ということになる。具体的には、内容に関するその人だからこそ持ち得ている知識や人間としての常識的な知識もあるだろう。それから、日本語そのもの（語彙や文法など）に関するものも含めた、日本語の運用に関する知識もこれに入るだろう。また、情報としては、文字や音声による言語的情報やその他の状況的な情報。さらには、「思うように表現できた」とか「分かった」といった経験そのものもこの資源と考える。

したがって、授業において必要となってくる要素は、将来の理解・表現活動の際の資源となり得る、日本語に関する知識を新に得たり、再確認したりすること。また、日本語を使って表現したり理解したりするプロセスを経験すること。

《一年間と通した授業の目標として》

上の「日本語能力」に対する考え方を踏まえて、一年間の授業の目標として次の４点を設定した。

（１）既に学習している「初級」における基礎的な文型（文法事項）と基本的な語

彙について体系的に理解し、十分に使いこなせるようになること。

（２）文単位のレベルだけではなく、より広い視点から日本語を捉え、全体的な文脈の中で理解及び表現する能力・技術を身につけること。（例えば、単文による表現時の文法形式の選択、単文間の繋がりの理解、文章での段落ごとの理解、文章全体の構成的な理解など。）

（３）また、語彙や表現文型、特にアカデミックな場面でよく使われると思われるものを増やしていくこと。

（４）自らの表現（会話、発表、作文など）で、自分の日本語使用やその結果をモニターする習慣を身につけること。

②教材：

《共通教材》

「生きた素材で学ぶ：中級から上級への日本語」

「留学生の日本語３　論文読解編」（一部抜粋）

《各担当教員による授業での教材》

「ジェイ・ブリッジ」（一部抜粋）

「毎日の聞き取りプラス４０　下巻」（一部抜粋）

「中・上級日本語教科書　日本への招待」（一部抜粋）

「インタビューで学ぶ日本語」（一部抜粋）

その他、学生の学習状況に合わせて適宜教材を使用した。

③授業内容：

基本的に午前中の２時限は、１時限目が共通教材を使用しての授業、２時限目が各担当教員の選定した教材を使用しての授業とした。共通教材を使用しての授業では、各教員が進度などの連絡を取り合うと同時に、教材の授業での扱い方などを統一的に決めて授業を進めた。一方、２時限目は、授業開始に当たって担任の嘱託講師から大まかな目標と方向性を各担当教員に示し、それに沿って各教員が選んだ教材をその教員の独自の使い方によって授業を行った。

午後の授業では、先の目標を踏まえた上で、さらに午前の授業との、及び授業相互の関連性を持たせ、一つの授業で学習した内容がその場限りとならないように、次のことを行った。

（１）初級文法、文型の復習と整理。

（２）午前の各担当教員の行う授業（２時限目）について口頭にて報告。

（３）午前の共通教材の各課の「本文」の要旨を簡潔な文章として表現。

また、学生の日本語運用上の課題に応えるために、新聞記事の読解や発音・音読の授業なども行った。

④一年間を振り返って：

今年度のⅢクラスは、授業開始時に相当程度の日本語の知識と能力を身につけているという点で、これまでの別科においてはあまり経験しなかったような学生であった。そのため、これまでの別科の経験をそのまま用いて対応することができなかった。その意味で、これまでの別科の教育体制に、一つの大きな課題を問いかけたクラスでもあった。

そんな状況の中でクラスの担任として、学生には多少の知識の不足や能力の未熟さがあっても、できる限りより高いレベルを求めて努力するように接してきた。しかし、その一方で、授業計画は学生のクラス分け試験後、急いで策定したものであったため、その妥当性は大いに検討されるべきだろうし、実際に実施した授業にも多くの改善の余地はあるだろう。しかし、今後の別科、あるいは学部進学に向けての予備教育における日本語教育での一つの方向性は提案できたのではないかと考える。

もちろん、学生にもこちらの意図どおりに能力を伸ばしてくれたものもあったし、それ以上の成長を見せたものもあった。また反対に思うような進歩が見られなかった学生もあった。しかし、だからといって、基礎的な知識の重要性は認めるものの、そのことにいつまでもこだわりすぎるべきではないと考える。そうした学生における結果の差異は、カリキュラム内容や授業の方法だけで決まるわけではないからである。

もう一つ、Ⅲクラスの授業を振り返る上で重要なことは、各担当教員の方々に、自らの授業を少しでも振り返る機会を提供する意味で実施した、「連絡帳」の新たな試みである。これまで、各教員間の申し送りとして、ほとんど進度のみを記入していた「連絡帳」に、進度とあわせて、各教員の授業での学生の学習状況を記入していただくこととした。学生をよく観察することは自身の授業を知ることにもつながるだろうし、他の教員の記述を見ることで自身の学生の見方を知るきっかけにもなるだろうと考えたからである。

こうした取り組みの結果あるいは成果は、まだはっきりとはわからない。このことについての各教員の評価もまちまちである。もう少し試行を続けてみる必要があるだろうと考えている。

５．その他の授業

前期集中授業

一年間（実質的には８カ月）という短い別科の学習期間を少しでも補うと同時に、前期で学習したことを再度整理し、後期からの学習につなげるために、夏休みに入る直前の７月後半（７月２１日から２６日までの４日間）、嘱託講師による授業を行った。

というのも、後期に入ると、すぐ学部推薦に関する試験及び面接があり、また留学生研修旅行や大学祭などによる休講と続き、なかなか集中して授業に取り組みにくい日程となっている。さらに、進路が概ね決まってくると学生自身の学習意欲も低下する傾向がある。その意味でも、前期の比較的集中して学習に専念できる時期に、できるだけ基礎固めをしておくことは重要である。

コンピュータ演習

１１月の後半から、毎週火曜日４時限目「日本語演習１５」の時間をコンピュータ演習の時間とした。ここでは、学内でのパソコンの使い方に慣れると同時に、日本語入力（ローマ字入力）の練習を行なった。それまで授業やそれ以外で書いてきた日本語の作文をパソコンのワープロソフト（Microsoft Word）を使って入力した。

特に中国人の学生にとっては、日本語の漢字の読みの重要性を認識する機会ともなり、別科としても、そうした問題に対する対応も今後の課題の一つである。また、パソコンの操作や入力方法について学生間で教え合ったり、コンピュータ教室使用のサポートに来ていただいた学園情報センターの職員の方に聞いたりして、授業とは異なる日本語による実際のコミュニケーションの場ともなった。

作文集作成

上記のコンピュータ演習の時間に打った各学生の作文は、一つの冊子としてまとめ「別科作文集　２００５」として発行した。これは、学生本人や保証人の他に、別科生が推薦されて進む学部学科をはじめとする学内の各部署に配布され、一年間の別科の成果を学内にアピールする機会ともなっている。

６．試験について

別科として行った主な試験は、週間試験、期末試験、統一試験の三つである。

週間試験：

各クラス別に、原則として毎週、授業の一環として各クラス担任の嘱託講師が中心となって行った。試験の具体的な目的や意図、内容や形式、フィードバック等については各クラスによって異なり、それぞれのクラス担当教員が一人一人の学生の学習状況を知り、その後の授業を行なっていくための一つの参考資料として利用された。

期末試験：

前後期末（７月と１月）に、各クラスがそれまでに学習した内容について試験が行われた。各担任の嘱託講師が具体的な目的や内容等を決定し実施。その結果は、各学生の成績の参考資料として利用された。

統一試験：

クラスや日本語のレベルに関係なく、全ての学生に共通の問題及び採点でもって、年３回（７月、１０月、１月）実施した。主な目的は、それぞれの学生の、学生全体の中における相対的な日本語の力を知ることで、初級終了レベルの文法、日本語能力試験２～３級レベルを中心とした読解と聴解の内容で行った。

７月及び１０月の試験結果は、学部推薦の際の参考資料として利用し、１月の結果は、各学生の、一年間の日本語力の伸び具合を知る一つの資料として利用した。

週間試験と期末試験は、学習した内容がどの程度身に付いているかを見る到達度試

験としてクラス別に行われたのに対し、統一試験は、実施時点での日本語力を見る能力試験であった。ただ、点数として出てきた数字をそのまま各学生の日本語の力とはできないものの、試験結果は学生の評価に大きな影響を与えることも事実である。その意味で、試験結果と日々の学生の学習状況などとの突合せを踏まえて、試験問題のさらなる見直しや採点方法の再検討などが必要である。

７．課外活動

親睦会（５月）

別科を修了し、現在本学の各学部学科で学んでいる先輩学生を招いて昼食会を行った。外国語である日本語ではなく、母語で、日本での生活、別科での勉強のこと、また学部での大学生生活など、来日したばかりの別科学生が、今後の生活や勉強についてさまざまな情報を得る場となっている。

茶道体験学習（６月）

学内の茶室において、日本語学科の関口伊都子助教授のコーディネートによる別科学生のための茶道体験学習を行った。来日したばかりの別科学生にとっては、貴重な経験になった。

留学生研修旅行（１０月）

本学国際交流センターが、本学に在籍する留学生全員を対象に参加者を募集して実施する留学生研修旅行に、別科学生も課外授業の一環として全員参加とした。旅行は２泊３日で、行き先は京都・奈良を含む近畿地方。関東地域以外の日本を見、日本式の宿泊施設に宿泊するため、普段見ているのとは異なる日本の一面を知ることができる。また、別科以外の留学生とも知り合い情報交換する機会ともなっている。

交流会（作文発表と昼食会）（１２月）

学生全員が、これまで書いてきた作文の中から一つを選び、他の学生の前で発表した。また、少数だったが日本人学生などといった外部からも学生の作文発表を聞きに来ていただいた。別科の中だけではなく、別科に普段関わらない人たちにも、別科学生の実態を知らせるいい機会でもあった。

その後、昼食会には、５月の親睦会に続いて、別科の修了生も参加して、先輩留学生として関係を深めると同時に、学部での勉強や生活などについての情報を得る機会ともなった。

８．修了後の進路　－学部推薦について－

２００５年度も、別科修了後、ほとんどの学生は学部推薦制度によって本学の各学部に進学した。この学部推薦制度は、本別科に入学する際の大きな魅力の一つとなっている。別科での成績、出席、本人の希望をもとに推薦者を決め、各学科の事前審査の後、諸手続きを経て、推薦入学が決まる。

本年度の学部推薦制度による別科学生の各学部学科への入学は、次の通り。

文学部	日本文学科	１名
経済学部	社会経済学科	１名
経営学部	経営学科	３名、企業システム学科４名
環境創造学部	環境創造学科	１名
国際関係学部	国際関係学科	１名
スポーツ・健康科学部	スポーツ科学科	１名

９．「別科通信」の発行　－保証人との連絡－

別科では、学生の別科における修学が円滑に進むように、各学生の保証人に対し、「別科通信」を発行し、各保証人との連携を図っている。別科側から保証人には、学生の出席、学習に関する状況を伝え、保証人側からは保証人の把握する学生の近況及び別科への意見・要望を寄せていただいている。

２００５年度は、４月、７月、１０月、１２月、２月の計５回の「別科通信」を発行した。こうした相互に連絡を図ることで、各保証人に対しては、単なる名前だけの保証人ではなく、学生の勉学や学外での生活により一層の関心を払っていただく一方で、別科としても、各保証人という第三者からの意見や要望を受け、今後の改善を進めていくことが重要である。

Ⅲ．今後の課題として

本学別科の今後に向けての課題は多いのだが、今年度（２００５年度）特に顕著だった日本語教育の面における問題点２点について触れたい。第１点は、先にも触れたが、今年度の特にⅢクラスでは、これまでの別科のカリキュラムでは十分に対応できないと思われ、担任教員（嘱託講師）を中心とした担当教員は急遽特別のコースカリキュラムで対応せざるを得なくなった。

別科におけるカリキュラムに関してはこれまでも課題として取り上げられてきている（大河原、2004）。しかし、今年度直面した事態は、今後の別科を見通した基本方針といったような理念的なものではなく、すぐさま対応を迫られるといった実際的なものであった。

別科では、ここ２年くらいは授業開始前に別科授業の基本的な方針として３つの点を掲げている。（３．一年間の授業〈別科全体を通しての教育方針として〉参照。）それらの方針は、①別科の1年間という学習期間と②例年入学してくる学生のレベル、及び③学部進学という学内における別科の基本的な教育目的を考慮して設けられたものである。

大河原（2004）において議論されているのは、学習者のまったくの初級から学部進学レベルまでの学習の道筋をカリキュラムとして具体化することであるが、実際に別科

に入学してくる学生は、一からそのカリキュラムの全ての道筋を進むのではなく、途中から入って途中で別科の課程を終えるということになるであろう。カリキュラムから見たとき、それぞれの学生は各々の日本語レベルの範囲の中で、その別科のカリキュラムを勉強することになる。その範囲が、例年は初級のほうに偏っていたのである。そのために別科としても初級に近い方ではカリキュラムばかりでなく教材や授業方法についてもかなりの経験が蓄積されており、そうした経験から、初級に近い学生に対する対応にはそれほど戸惑うことは少ない。

しかし、今回のように既に初級レベルは終え、更なるレベルアップが必要な学生に対して、どのような教育を具体的に行っていくかは、その基本的な方針とともに、全くと言ってよいほど準備不足であった点は否めない。こうした初級を終えた学生に対して、別科の教育目標である学部進学レベルに結び付けるための日本語教育をいかに実現していくかは、今後の残された大きな課題である。

第2点目は、各クラスにおける嘱託講師による日本語教育体制の問題である。各クラスの担当者からの報告（4．各クラスの授業内容の概要）でも明らかなように、別科全体としての教育方針が3名の嘱託講師の中で必ずしも十分に理解・共有されているとは言えない。その結果、各嘱託講師の、クラス授業の内容や方法の決定に対する裁量が大きくなりすぎ、個々の嘱託講師の独自の判断で授業運営が行われ、十分な成果に結びつかないといったことも起こり得た。

特に、別科において未経験の教授法を移植しようとする場合は、その教授法の特徴、導入の方法や形態、より重要なことは、それを担う各教員に対する理解・あるいは訓練をどのように実施するかといったことが、十分慎重に検討されなければならない。別科でのこれまでの経緯を過小評価した安易な判断は避けられるべきである。しかし、その一方で、毎年異なる学生の状況および一年間の学生の日本語学習の過程をより的確に把握し、柔軟に対応した授業運営が求められていることも事実である。その意味で、現在のような体制を前提とする限り、個々の嘱託講師には日本語コースのコーディネーターとしての高い判断能力が求められているともいえる。

しかし、こうした個人の能力に多くを依存するような体制は、組織的な教育という面においても不安定であるばかりでなく、3名の嘱託講師間の負担の偏在を温存する結果につながってしまう。別科の組織として安定的に日本語教育の質を確保していくためには、別科全体としての観点から各クラスの授業に関して評価し、必要があれば修正を行うといった機能が必要になるであろう。そうした機能が十分に働いていれば、今年度のような嘱託講師個人の判断による授業運営の進め方にも、より妥当性を高めることができたであろう。

Ⅳ．おわりに

今年度（２００５年度）の別科の活動を振り返ると同時に、今後の別科の課題のうち、今年度直面した問題に関連した点について考えた。別科に根本的な変革が必要であ

ることは既に自明のことである（大河原、2005）。別科に嘱託制度が導入され、嘱託講師がコーディネートを担当するようになって既に10年近くが経過した。これは一つの変化をもたらすのに、決して不十分な時間ではない。しかし、依然として根本的な問題は未解決のまま残されている。本学別科における「嘱託講師」という制度にも大きな矛盾と問題点をはらんでいる。そして、そうした組織的にも問題を抱えた別科ができることには自ずと限界がある。ここでの別科の「悲鳴」が学内全体に届き、大きな新しい変化がもたらされることを切に期待する。

尚、本稿において、今年度の別科の活動を振り返るにあたって、Ⅰ、Ⅱクラス担任の清水、松嶋両嘱託講師から各担当クラスの報告をいただいた。

参考文献

大河原　尚（2004）「別科日本語研修課程　この一年を振り返って　―2003年度活動報告及び今後の課題として―」『別科日本語教育』第６号、大東文化大学別科日本語研修課程、51－65頁。

大河原　尚（2005）「大東文化大学における別科及び留学生受け入れに関する問題と今後　―平成１６年度日本私立大学団体連合会日本語教育連絡協議会における報告から―」『別科日本語教育』第７号、大東文化大学別科日本語研修課程、12－25頁。